GAS MUSEUM がす資料館　2023年第二回企画展

震災復興 100 年

同潤会アパートが創った昭和モダンライフ 展

会期：２０２３年 ７月１５日(土) 〜 ９月１８日(月･祝)

会場：＜ GAS MUSEUM がす資料館＞　ガス灯館２階

ごあいさつ

GAS MUSEUM がす資料館では、2023年度第二回企画展として、2023年７月15日(土)から 9月18日(月・祝)までの期間、『震災復興100年「同潤会アパートが創った昭和モダンライフ」』展を開催します。

大正12年（1923）9月1日に首都圏を襲った関東大震災は、東京の街と暮らしに甚大な被害をもたらしました。その復興において、新たな都市の住まいの形を創り出し、モダンで安全、快適なくらしの象徴となったのが「同潤会アパート」でした。

同潤会は、震災の直後の大正13年（1924）5月に、被災者に安定した住宅を供給することを主な目的として、世界各地からの義援金を原資として設立された財団法人です。

当時の日本の建築界を担う人材が集められた同潤会。災害に負けない都市での新たな住まい方を模索しつつ、日本の先駆けとなる画期的な集合住宅を創りあげます。電気・ガス・上下水道完備の鉄筋コンクリート造の「同潤会アパート」は、震災後わずか3年という短期間で実現しました。同潤会アパートは、被災した都市の人々の理想的な住まいとして憧れの的となり、昭和モダンな暮らしぶりを世に広めていきます。その様子は当時の新聞や雑誌でも取り上げられ、入居申込が殺到してなかには倍率20倍を超えるほどの人気を博したアパートも登場しました。

本展では、震災からちょうど3年後の大正15年（1926）9月1日に貸し付けを開始した「青山アパート」をはじめ、都市近郊での緑豊かなコミュニティの集合住宅居住の姿を示した「代官山アパート」、都心居住の新たなシンボルとなった同潤会の集大成「江戸川アパート」を中心に取り上げています。

関東大震災100年を機に、同潤会アパートが創りだした安全で快適な住まいでの昭和モダンの暮らしぶりを、当館収蔵の当時の写真や、実際に当時の建物で使われていた、風呂釜などのガス機器や設備の現物とともにご紹介します。

GAS MUSEUM がす資料館

■展示作品一覧

【展示解説】　　学芸員　高橋　豊

第一章　関東大震災発生と同潤会の設立

「震災の被害と避難」

１）大正震火災木版画集　黄昏の日本橋
西沢笛畝　大正12~13年(1923~24)

２）大正震火災木版画集
路上の残骸（凌雲閣）
磯田長秋
大正12~13年(1923~24)

３）大正震火災木版画集
西郷銅像
桐谷洗鱗
大正12~13年(1923~24)

４）大正震火災木版画集　宮城前天幕村
川崎小虎　大正12~13年(1923~24)

「震災復興と(財)同潤会の設立」

甚大な被害を受けた街では、震災復興が急務となっていきます。

震災直後の大正13年（1924）5月、世界各地や全国からの義援金1,000万円を原資として内閣府により「財団法人同潤会」が設立されました。同潤会は、罹災者のための住宅と生活再建のための社会施設を建設し、運営することを目的としていました。

同潤会の組織には、当時の建築界を担う人材が集められ、社会的な期待を担っていました。設立当初の第1回評議委員会において、大正13～14年度における住宅建設を、「アパートメント」1,000戸、「普通住宅」7,000戸と決定しました。

同潤会は、まずは罹災住民向けの一時的な仮住宅を大正13年（1924）10月～12月に2,160戸建設します。これは当初計画にはありませんでしたが、東京都心のバラックを撤去するための応急措置でした。仮住宅の入居者は、同時に建設が始められた「普通住宅」への優先入居が認められていました。

そして、大正14年度（1925）から始められたアパート

48）ベランダでの安部民雄夫妻
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)

49）安部民雄氏宅　書斎六畳
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)

50）鈴木東民氏宅　居間
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)

51）鈴木東民氏宅　書斎兼応接室
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)

52）浴室
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)

「同潤会江戸川アパートでの生活」

53）江戸川アパート　中庭遠景　平成15年(2003)

54）江戸川アパート　中庭風景　平成15年(2003)

55）江戸川アパート　社交場ガラス扉　平成15年(2003)

56）江戸川アパート　食堂設置時計　平成15年(2003)

57）江戸川アパート
４階１６号室　居間サイドボード風景　平成15年(2003)

58）江戸川アパート
４階１６号室　居間　壁紙　平成15年(2003)

59）江戸川アパート
４階１６号室　寝室　平成15年(2003)

60）江戸川アパート
２階２９号室　広縁　平成15年(2003)

第五章　建屋のライフライン設備

「電気設備について」

61）青山アパート　通路階段照明　写真　平成15年(2003)

62）青山アパート　通路階段照明　大正15年(1926)頃

63）青山アパート　通路階段天井灯スイッチ　写真　平成15年(2003)

64）青山アパート　通路階段電気スイッチ　大正15年(1926)頃

65）江戸川アパート　電力メーター(10A)　写真　平成15年(2003)

66）青山アパート　ベークライト製室内灯ローゼット　大正15年(1926)頃

「水道設備について」

67）アパート　水洗便所　写真
アパート居住者 生計調査報告書　昭和11年(1936)

68）青山アパート　屋上共同洗濯場　写真　平成15年(2003)

69）青山アパート　屋上共同洗濯場水道蛇口　大正15年(1926)頃

「浴室設備について」

70）江戸川アパート　タイル浴槽　写真　平成15年(2003)

71）江戸川アパート
人造石研ぎ出し仕上げ浴槽　写真　平成15年(2003)

「台所設備について」

72）アパート　台所風景
写真
アパート居者 生計調査報告書
昭和11年(1936)

73）ガス洗面湯沸器　写真

74）青山アパート　台所風景　写真　平成15年(2003)

75）江戸川アパート
４階１６号室　台所　写真　平成15年(2003)

76）スチームラジエター　江戸川アパート設置品　昭和９年(1934)頃

「室内ガス栓設備について」

77）青山アパート　設置ガス栓　写真　平成15年(2003)

78）青山アパート　設置ガス栓　大正15年(1926)頃

79）代官山アパート　設置ガス栓　写真　平成８年(1996)

80）代官山アパート 設置ガス栓　大正15年(1926)頃

81）ガスアイロン　昭和初期

「ガスメーターについて」

82）青山アパート
台所コンロとガスメーター設置風景　写真　平成15年(2003)

83）代官山アパート
独身寮ガスメーター設置風景　写真　平成15年(2003)

84）江戸川アパート
玄関扉とガスメーター点検BOX　写真　平成15年(2003)

85）江戸川アパート
ガスメーター点検BOX内部　写真　平成15年(2003)

「同潤会青山アパートガス設備設置図面について」

86）青山アパート　一期・二期ガス配管図面　大正15年(1926)

87）はやわき釜　江戸川アパート設置品　昭和９年(1934)頃

88）２４号円型ストーブ　江戸川アパートより　昭和９年(1934)頃

第六章　同潤会の解散から精神の継承

おもな参考文献

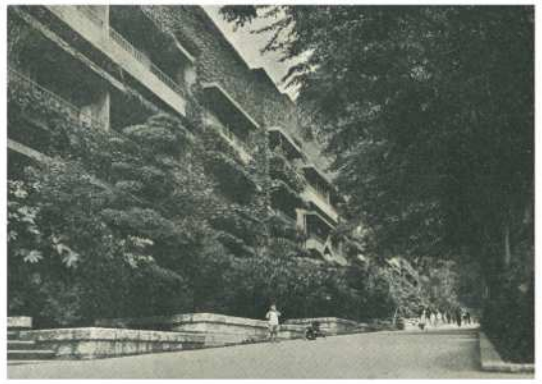
建築雑誌　昭和２年 (1927)7月号	1927 年
アサヒグラフ　昭和７年６月１日号	1932 年
「婦人之友」　昭和10年8月号より	1935 年
アパート居住者　生計調査報告書	1936 年
同潤会アパート原景	1992 年
同潤会のアパートメントとその時代	1998 年

メント事業では、都市部における災害に負けない新たな都市での住まい方を模索し、日本でのコンクリート製の集合住宅の先駆けとなる「同潤会アパート」を創り上げました。市街地での用地取得に難儀しながらも、中之郷を皮切りに、青山、渋谷（後の代官山）、柳島アパートが次々と着工していきます。
そして、震災からちょうど3年後の大正15年（1926）9月1日から、入居貸し付けを開始しました。その後、昭和9年（1934）竣工の江戸川アパートまで、計16ヶ所、総戸数2,798戸が建設されていきました。
昭和5年頃から同潤会は、震災後新たに登場した都市の中産階級の人たちが、郊外部で定住する居住スタイル浸透の契機のひとつとなった「戸建て木造分譲住宅」の建設にも取り組みました。
昭和16年（1941）、住宅営団にその事業を引き継ぎ、同潤会は18年間の活動を終えました。

５）仮住宅所在地各図
仮住宅事業報告 昭和4年 より　昭和４年(1929)
６）建築された復興住宅
仮住宅事業報告 昭和4年 より　昭和４年(1929)
７）佐野 利器 氏　内田 祥三 氏　肖像写真
８）仮住宅事業報告　同潤会　昭和４年(1929)

第二章　同潤会青山アパート誕生

同潤会青山アパート（以下、青山アパート）は、大正14年(1925)11月に起工し、震災からちょうど3年後、大正15年(1926)9月1日から入居貸し出しを開始しました。
明治神宮に続く表参道に面した傾斜のある細長い三角形状の敷地に、第一期として通りに面して３階建ての住棟が５棟建設されました。
昭和2年（1927）に第二期工事が終了して完成した青山アパートは、総戸数138戸で、うち137戸が家族向けの三部屋または二部屋の居室を持つ間取りでした。各戸には電気、ガス、上下水道が完備され、屋上には共同洗濯場と物干し場、ならびに共同浴室が設けられていました。
建物の外観も、日本で最初に風致地区に指定された表参道の景観を意識し、建設の際に配慮がされていました。
表参道通りに面して建つ住棟は、通りとの間に植栽空間を設けて傾斜のある街路と適度に距離をとりながら、外階段を介して建物の入口を通りに直接つなげる構成となっていました。通り沿い東側の一角には、街に開かれた公園空間が設けられ、表参道の景観に奥行きを与えています。第二期工事で建てられた住棟は、通りに面した公園から緩やかにつながった中庭を囲み、住民の憩いの場となりました。
時代を経て、戦後、原宿地域がファッションと先端的な文化の街として発展してゆくと、青山アパートは、通りに面した住棟にブティックやギャラリーが入る都会的で洗練されたスポットとして、表参道の景観を象徴する場所となりました。
平成15年(2003)5月に、青山アパートは再開発のため取り壊され、平成18年(2006)に跡地には複合施設「表参道ヒルズ」が建設されました。その東側の一角には、かつての建築部材を再利用し、外観を忠実に再生して青山アパートの記憶を継承した「同潤館」が建てられています。



９）青山アパート外観
アパート居住者 生計調査報告書　昭和11年(1936)
10）青山アパート　Ａ号入口
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
11）青山アパート　中庭面
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
12）青山アパート　Ａ号屋上
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
13）青山アパート　Ｂ号玄関内部
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
14）青山アパート　Ａ号洋室内
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
15）「虫ぼし」　青山アパート
アサヒグラフ 昭和7年6月1日号より　昭和７年(1932)
「同潤会青山アパートでの生活」
16）アパートメント配置図
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
17）二号二連アパートメント平面図
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
18）Ａ号アパートメント立面及一・二階平面図
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
19）青山アパート　解体時外観横風景
平成15年(2003)
20）青山アパート　解体時外観風景
平成15年(2003)
21）青山アパート　玄関扉　平成15年(2003)
22）青山アパート　洗面台　平成15年(2003)
23）青山アパート　建物裏勝手口
平成15年(2003)

第三章　同潤会代官山アパートの建設

同潤会代官山アパート（建設当初は渋谷アパートと呼ばれていた。以下、代官山アパート）は、日本で初めて建設された、本格的な郊外型の緑豊かなコミュニティを形成した団地型の集合住宅です。
大正14年(1925)に、渋谷駅南の高台からの傾斜地を敷地として入手します。敷地面積は同潤会アパートで最大の敷地を誇る5,967坪でした。まだ東急東横線も開通しておらず、静かな町でした。
大正15年(1926)末に東急東横線が着工し、敷地に隣接する道路も整備が開始され、交通インフラの整備と一体的に団地計画が進められました。
昭和2年(1927)に貸付が開始された代官山アパートは、閑静で広大な敷地と自然の丘陵の地形を生かして、新たな郊外型の都市居住のモデルとなる、美しい街を築きあげます。南北に通る「イチョウ通り」と、南斜面の中ほどを東西に結ぶ「すずかけ通り」が軸となり、この二つの通りが交差する中心部には、広場が設けられています。
その中心部周辺には、団地での生活の質を高め、自足的な生活を可能にするために、食堂や商店、公衆浴場がつくられ、住民のコミュニティを醸成する場が計画されていました。
住棟も、青山アパートなどで用いられた3階建ての中層の建物に加え、2階建て4戸1住棟の低層棟(E号棟)が、斜面の傾斜地に等高線に沿うように、南向きに配置されました。緑に囲まれ、低層でゆったりして日照も得られる住棟が並ぶ姿は、代官山アパートを象徴する景観となりました。
住戸は、家族向けの住棟に加えて、独身者向け住棟も4棟、計94戸が設けられ、昭和5年（1930）の第4期竣工をもって、最終的に計36棟337戸の団地となります。モダンな生活を体現した当時憧れの住まいとなり、人気を博しました。
戦後も、渋谷駅から至近な立地ながら閑静で洗練された代官山の街とともに、時を重ねていきましたが、平成8年（1996）に再開発のため取り壊しがはじまりました。現在は、跡地に建つ平成12年（2000）に竣工した代官山アドレスが、街の新たなシンボルとなっています。

24）代官山アパート　Ｓ号正面
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)

25）代官山アパート　Ｅ号内部
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
26）代官山アパート　全景
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
27）代官山アパート　店舗の一部
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
28）代官山アパート　Ｓ号食堂
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
29）代官山アパート　Ｅ号外部
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
30）代官山アパート　Ｅ号内部
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
31）代官山アパート　Ｓ号室内
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
32）「庭のない家」　代官山アパート
アサヒグラフ 昭和7年6月1日号より　昭和７年(1932)
33）「豆腐の赤旗」　代官山アパート
アサヒグラフ 昭和7年6月1日号より　昭和７年(1932)
「同潤会代官山アパートでの生活」
34）アパートメント配置図
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
35）Ｅ号アパートメント各階平面図及立面図
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
36）Ｂ号アパートメント各階及屋根平面図
建築雑誌 昭和2年(1927)7月号より　昭和２年(1927)
37）代官山アパート　商店アパート(29号棟)
平成８年(1996)
38）代官山アパート　29-30号間　屋外階段
平成８年(1996)
39）代官山アパート　食堂カウンター
平成８年(1996)
40）代官山アパート　2階建て4戸1住棟前風景
平成８年(1996)
41）代官山アパート　建屋入口　平成８年(1996)
42）代官山アパート　独身室の窓側
平成８年(1996)

第四章　同潤会江戸川アパートの竣工

同潤会アパートとして最後に竣工した江戸川アパートは、新宿牛込の神田川近く、川田男爵屋敷があった南側2,061坪の地を入手して、昭和9年(1934)に建てられました。
同潤会10周年記念事業として建設された江戸川アパートは、これまでの知識と経験を元に、当時最先端技術と機能を備え、「東洋一」とうたわれた建物でした。
住棟は、当時としては高層の6階建ての1号館と4階建ての2号館の2棟、計260戸の都心立地の集合住宅でした。2棟に囲まれた中庭は居住者のための閉じた外部空間で、児童遊園も設けられていました。
共同設備としては、共同浴場や食堂をはじめ、社交場や理髪店、１号館にはエレベータも設置されていました。特徴的な住戸設備としては、室内暖房用としてスチーム暖房が配管設置されていたほか、一部の住戸ではラジオや電話も利用でき、11戸でありますが内風呂のある住戸もありました。
昭和10年(1935)の「婦人之友」の記事によると、入居後も居住希望者が絶えることなく、希望者月100人ほどに対し、引っ越すのは月1～2人ほどしかいませんでした。
家族向けの住戸は居室が2～4室ある間取りでしたので、家賃も20円から45円以上の幅がありました。
平成15年(2003)に取り壊され、跡地には、平成17年(2005)にアトラス江戸川アパートメントが誕生しています。

43）江戸川アパートメント　表札　平成15年(2003)
44）アパート入り口
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)
45）中庭とアパート建屋
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)
46）江戸川アパート　社交場
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)
47）整理された台所と朝の朝食
「婦人之友」昭和10年8月号より　昭和10年(1935)